

そんな折、町長さんから頼まれたという役場の課長さんが病院へ見舞いに訪れ、「役場に入らないか」と藪から棒に誘われました。元々漁師も好きだったし、また元気になったら漁師になろうと思っていましたが、当分の間は無理を控えて養生するよう医師から宣告を受けていたので、家族と相談した結果、軽い気持ちで慣れないネクタイを締めスーツで役場に行くことになりました。「あなたの青年活動の活躍や将来を見据えた考えを是非町民のために活かしてほしい。これは一種のヘッドハンティングなので頑張ってください」と出勤初日、当時の町長からいただいた誉め言葉の口車に乗せられ、役場職員となったのです。今思えば試験もせず、こんな口約束で地方公務員になれたのですから面白いと言うほかはありません。後に朝日新聞に書かれましたが、私は「酒を飲み過ぎて地方公務員になった男」なのです。

早速私は教育委員会に配属となり、社会教育・公民館活動を担当することになりました。当時の双海町の公民館活動は、36の集落ごとに自治公民館があり、その活動は全国優良公民館表彰を受けるなど充実期にあり、私も出かける公民館として、土日にも夜も昼もその指導に明け暮れ、時には夜間勤務が連続40日も続くなど、働き方改革の進んだ現代から考えると、超勤手当などないに等しい激務をこなし、住民自治活動にのめり込みました。

勤務し始めて3年目に、教育委員会にありながら月2回発行の町の広報「ふたみ」の編集も担当し、激務は病気前を超え、家族は心配したようですが幸い健康も回復し、自分一人で編集した広報紙は10年間で240号に達するなど、多分全国的にも珍しい連載記録を打ち立てた広報マンだったようです。

公民館活動では県下でも珍しい洋服だけの成人式を行い、また公民館結婚式、つまり「会費1万円です嫁さんを貰おう」なんてフレーズで会費制の公民館結婚式運動を興し、その結婚披露宴の司会を367組やった記録も持っていますが、私の発想

実施した「金儲けの公民館活動」や20戸の集落で40人集まる出席率200%の「夫婦学級」が全国的に注目を集めるようになりました。

ある日、東京のNHKから電話があり、「明るい農村」というテレビ番組に「村の若先生」というタイトルで出演することになりました。取材の電話打ち合わせでは、カメラマンとディレクターの2人が列車に乗って東京から来るというのです。私は約束していた上灘駅へ迎えに行きましたが、列車が到着しても2人は降りて来ませんでした。「おかしい」と思いつつ駅舎待合室で待っていると、駅前雑貨屋のおばちゃんが息せき切ってやって来て、「今役場から電話がありましたが、貴方が待っているNHKの人はどうやら上灘駅と下灘駅を間違っただけで乗り過ごしたようで、迎えに行くようにとのことです。早く行かないと日が暮れますよ」というのです。携帯電話などなかった長閑な時代でした。私は急いで公用車を走らせ下灘駅に向かいました。2人は駅前の雑貨屋の電話を借りてかけたようでしたが、駅のプラットホームで今まさに西瀬戸の水平線に「ジューン」と音を立てて沈まんとする夕日を眺め、「私たちは降りる駅を間違っただけでラッキーでした。こんな綺麗な夕日を見たのは初めてです」と興奮した面持ちで私に話しました。この間違いと2人の夕日を見た感動の言葉がなかったら、恐らく私と夕日との出会いはなかったかもしれないのですから、世の中は分からないものです。

4 町名変更騒動

そんな時期に双海町で町名変更騒動が起こりました。双海町の公民館では毎年冬場の農閑・漁閑期を利用して2班に分かれ、地区を回って町長も出席する町政懇談会を行っていました。その折上灘町と下灘村が昭和30年に町村合併促進法によって合併し、双海町が誕生したものの、20年以上経っても合併前の旧町村のエゴが色濃く残り、町の知名度も上がらず、むしろ過疎が進む現状に町民の不満の声が上がりました。その反省会で町長